

なぜ 英語が話せないの

<10>

の最年長。ともに英会話の必要性が現在ほど重視されない時代に大学を卒業。「自分の苦い経験から、生徒にはできるだけ生きた英語を」と、ほかの先生と話し合つてヒアリング・テストを導入した。

父兄や生徒からは当初、不満も出たが、今では軌道に乗った感じ。近藤先生より三世代近く

アメリカ人は、カヌラの「ニ」つていないソフトドリンクの店。たちの発音やヒアリング能力を「コン」を「ナイコン」と発音で「グラス・オブ・ミルク・プ」少しでも伸ばそう」と今、ある。ラテン語からきた「ai リーズ」と注文しても、ミルク 実験を行っている。

身につく実用会話

城南中の試み 中間、期末試験にヒアリング

Viは本来「アリビ」が正しいの発音が悪いと、聞き返す。ミが、米英人は勝手に「アリバ」ルクは米英人にとつても難しい「イ」と読み、それが一般化し発音の一つ。日本語では「メル」は中間、期末試験の二回、マイた。米国人は種々のつぼ。違つク」に近い。かくて発音のできな日本語を話す異国民の集合国家だけに、間違つた発音が横行しても不思議はない。

なのに米英人は、外国人が不正確な発音をする、容易に理解しない。例を、オレンジック、ユースとミルクとコーラしか売

も若い小島悦朗先生(三)は、英会話が得意で、全面的に協力。円能寺久美子先生(三)も夏休みを利用して東京で十日間の会話指導を受けるなど、意欲的である。「ヒアリングの問題は、先生がテープに吹き込み、各教室に流す。おもしろいのは文法や英訳などと異なり、零点の生徒がいないこと。平均得点は十満点で七点にもなる」(近藤先生)。

生。ヒアリング・テストについて、生徒の一人は「日常会話や、道の尋ね方など実用会話が身につく」と、その効用を指摘する。しかし、昨年度以来、英語の授業時間が週三時間に減った結果、今年まで行われていたユニークな試みも、目下、一



ヒアリング・テストに意欲を燃やす近藤先生と生徒たち

は、深刻に悩んでいる。